

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	『平家継図并平家一部歌』 解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1991
Jtitle	三田國文 No.15 (1991. 12) ,p.26- 36
JaLC DOI	10.14991/002.19911200-0026
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19911200-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19911200-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『平家継図』并平家一部歌 解題・翻刻

石川 透

## 解題

ここに紹介する『平家継図』并平家一部歌は、『平家之継図』『平家一部之引歌』『釈教歌』の三章から成る一冊本である。前二章は、『平家物語』の系図と和歌の抜書である。〔釈教歌〕は、内題はないが、解脫上人・弘法大師等の和歌とその解説である。

最初に、本書において最も丁数が割かれている「平家一部之引歌」について解題を行いたい。最近、櫻井陽子氏「資料紹介 神宮文庫蔵『平家物語』和歌抜書」（『軍記と語り物』二十七・一九九一年三月）・「『平家物語』の受容の様相——神宮文庫蔵『平家物語』和歌抜書」を通して——」（『国文』七十五・一九九一年七月）によって、『平家物語』の和歌抜書が紹介された。その中で、江戸期の写本七本について触れられ、延宝六（一六七八）年写の神宮文庫蔵本が翻刻されている。櫻井氏によれば『平家物語』の底本としては、七本のうち、五本が流布本、一本が中院本、残りの一本が「源平盛衰記」であるという。

ここに翻刻した「平家一部之引歌」は、筆写時期において、

そらら七本を遡りうるものであり、内容的にも使用底本に問題がある本であるといえよう。まず目につくのが、一二巻の巻数が記されていないが、その位置が、『平家物語』諸本と異なっていること、作者名の宛字が甚だしいことである。このように記されている『平家物語』の存在は寡聞にして聞かない。おそらく、筆者の写し誤りと宛字によるのであろう。そして、和歌・作者名を詳しく調べると、誤写と思われる箇所がいくつも見出されるのである。例えば、95番歌第五句は、「盛ケレ」では字足らずである。諸本にあるように「盛ナリケレ」が正しいであろう。

このようにみると、本書は誤りの多い写本のように思えてくるが、そうばかりもいえないようなのである。何はともあれ、まず、本書がいかなる系統の『平家物語』を写したものであるのか、から考えてみたい。

先にも記したように、本書は一二巻本を写したものである。その巻の位置に問題は残るが、灌頂巻と記されていない以上、元になったものは八坂系ということになる。次に、抜書された

和歌の数をみると、ちょうど百首になる、この数は、一方系流布本の和歌の数に等しい。そこで、本書の和歌と一方系流布本の和歌を較べると、意外にも似ているのである。

本書の和歌番号を使って、流布本の和歌の出入りを簡条書きしてみると、

(1) 18 19 の間に、流布本には「しらなみの」「おもひやれ」の二首がある。

(2) 46 の位置は、流布本では 43 44 の間である。

(3) 47 48 は流布本にはない。

(4) 56 の位置は、流布本では 54 55 の間である。

(5) 78 79 の間に、流布本には、100 の歌と「いかにせん」の二首が入る。

(6) 91 は流布本にはない。

となる。流布本にあつて本書にない歌が三首、流布本になく本書にある歌が三首あることになる。この程度の出入りならば、本書は一方系流布本とみてよいようにも見える。しかし、それでは、巻立てから判断される八坂系という答えと矛盾してしまう。そこで、和歌三首の出入りを中心に検討してみよう。

(1) の流布本の二首は、本書の欠脱のようにもみえる。八坂系の百二十句本等諸本にもこの二首が入っていることは、欠脱説を裏付けるものといえよう。しかし、八坂系でも、両足院本、如白本等にはこの二首が欠けている。写す際の欠脱ということもありうるが、この二首を含まない八坂系の写本がある以上、本書はその系統の本をうつしたことになる。

(2) の 46 の位置が異なっている理由はわからないが、47 48 とい

う他本にない歌が次にきていることと何か関係があるのだろうか。

(3) の 47 48 の歌は、平家物語諸本には見出せない歌である。48 の歌は、『太平記』巻二十一「塩治判官讒死事」の、源三位頼政の歌、

五十雨ニ沢辺ノ真薦水越テ何菖蒲ト引ソ頼フ（『日本古典文学大系』）

に、第二・三・五句が違いながらも似た歌である。作者名も頼政で一致している。そのようにみると、47 の歌も、同じく『太平記』で、「五十雨に」の歌の少し後にある、薬師寺次郎左衛門公義の歌、

返スサへ手ヤフレケント思ニゾ我文ナガラ打モ置レズ

に似た面がある。作者名も違い、第一句から五句まですべて違っているが、「返ス」「手ヤフレケン」等同一語句が使用されているのである。47 の第一句の「玉章ヲ」は、46 の第一句と同じであることも気にかかる。前にみたように 46 の位置は、本来的には 43 44 の間であつた。あるいは、46 をこの位置にしたのは、同類歌の 47 を導き出すためではなかつたか。その 47 は、『太平記』で 48 と関係ありそうである。『平家物語』諸本にはこのような写本は見出せないことから、本書の書写者が、(2)(3) を作爲的に行つたのかもしれない。もちろん、このような連想で記された『平家物語』を、そのまま写したことも可能性としては考えうる。

(4) は、『平家物語』では、56 55 の順番で行われる歌のやり取りである。何らかの手違いで順番が逆になつたのであろうか。

(5) の流布本の二首のうち、100 の歌は本章の末尾に記されてい

るが、「いかにせん」の歌は欠脱している。何らかの誤りがあつて、100の欠脱のみ気付いて巻末に入れたのであろうか。これも、元の『平家物語』に既に誤脱があつたのか、抜書筆者が落したのかは不明である。欠脱の状態は(1)に似ているが、こちらは両足院本・如白本等に掲載されている。

(6)の91は一方流諸本には見出せず、八坂系諸本に見られる歌である。鎌倉本のこの歌を記すと、

白波ノ打驚ス岩ノ上ニネイラテ松ノ幾世経ヌラム(『鎌倉本平家物語』)

となる。第三句以下大分異なっているが、元になつたのはこの歌とみてよいであろう。このことは、本書の元本が八坂系であることをさらに裏付けることになる。それでは、八坂系諸本のうち、どの本に最も近いのであろうか。全くの同一歌は見出せないが、如白本に、

白波ノ打驚ス岩ノ上ニ根入ラテ松ノ元世経ヌラン(『彰考館藏写本』)

とある。八坂系諸本とほぼ一致しているが、第五句に「无歟」と傍書してある。これは、あるいは、91番歌の「ナキ」とあるのと繋がるかもしれない。

以上のようにみえてくると、本書の流布本との差異は、そのいくつかが八坂系の本文の特徴を示しているのである。ただし、八坂系諸本の和歌の数は、本書より多いのが普通だ。歌の数や、内容からすると本書は一方系流布本に近い面もある。相矛盾している現象のようにみえるが、一方系流布本に近い本文をもつ八坂系本が存在すれば、本書の祖本はその系統であろうと想像

がつく。実は、そのような本は実在し、先に少し触れた、両足院本・如白本等の系統諸本(山下宏明氏『平家物語の生成』によれば、八坂流第四類本)がその条件を満たすのである。

それでは、本書が八坂系の中でも両足院・如白本に近いことを示す例をいくつかみてみよう。58番歌第三句「打詠メ」は、一方系諸本・八坂系諸本のほとんどが、「カヘリミテ」である。ところが、両足院・如白・米沢本等は、58番歌と同じ「打詠メ」である。また、61番第五句「思出ラン」は、一方系・八坂系諸本では「思ひしるらん」「わすれ給はじ」等であるのに対して、両足院・如白・米沢本は61番歌と同句である。

『平家物語』八坂流は、主に室町期に流行し、写本も室町期から江戸初期の筆写が多いことで知られている。本書の筆写時期もほぼそれと同時期と思われることから、一方流本文に近い八坂流『平家物語』から本書が作られたとみてよいのではなからうか。

本文を精査すると、先に述べたように、一方流・八坂流の両者とも異なる部分もあり、それが単なる誤写なのかどうか、問題は残るが、一応このように結論付けたいと思う。

順序が逆になつたが、「平家之継図」について略記する。『平家物語』の系図は、単行本としても『平家物語系図』『平氏系図』等があり、『平氏系図』は、『統群書類従』にも入っている。本書の基になつたのもこのような単行本という可能性もあるが、八坂系『平家物語』にも文禄本(筑波大学図書館蔵写本)等のように、系図をともなつた写本が存在することから、本書の系図も、『平家物語』付載の系図を記したのではないかと思われる

る。

本書巻末の「〔釈教歌〕」も問題が多い。順番に典拠等を見ていくと、最初の「吾行テ」の歌は、『玉葉和歌集』巻第二十、二七三番歌にあり、「我ヲ知レ」の歌は、『続古今和歌集』巻第七、六八七番歌にある。両者とも歌に異なる点がある。しかし、より近いかたちをとるのは、『沙石集』巻一「神明慈悲ト知恵ト有人ヲ貴給事」の一節では、

解脱房上人、笠置二般若臺ト名付テ、閑居ノ地ヲトテ、明  
神ヲ請ジ奉 給ケレバ、童子ノ形ニテ、上人「ノ」頸ニ乗  
テ渡ラセ給ケリ。サテ御詠有ケリ。

ワレユカン行キテ護ン般若臺 釋迦ノ御法ノアラン限

或る時般若臺ノ道場ノ虚空ニ、御聲バカリシテ、

我ヲシレ釋迦牟尼佛ノ世ニ出テ サヤケキ月ノ世ヲ照

ストハ（『日本古典文学大系』）

とあるように、二首ともに登場しているのである。

「皮生テ」の歌は、典拠未詳である。

「今更ニ」の歌は、『歌仙落書』一〇〇番歌に、

二条院讀岐 四首 賴政朝臣女

風体えむなるを先として、いとほしきさまなり、女の

うたかくぞあらめとあはれにも侍るかな、家の風たえず  
申さむ事もおろかなり、ちちの朝臣よりは、えんな  
るかたは立ちまさりてや、末の世には出来がたくなむ、  
九月ばかりね覚がちな床ちかく、むしの声かかれが  
れに聞ゆる暁がたに、夢さめたる心地こそすれ

始思はで後思ふ恋といふことを

今更におもふもいふもたのまれずこれも心のかはると思へ  
ば  
とある歌と同一のようだが、作者も作歌事情も大きく隔たつて  
いる。

「法性ノ」の歌は、『新勅撰和歌集』巻第十、五七四番歌に、  
土左国室戸といふところにて 弘法大師

法性のむろとといへどわがすめばうみの浪風よせぬ日ぞな  
き  
とある。やはり和歌に異なる点もあるが、作者・作歌事情は同  
じようだ。

「靈山ノ」の歌は『拾遺和歌集』巻第二十、一三四八番歌に、  
南天竺より東大寺供養にあひに、菩提がなぎさにきつ

きたりける時、よめる

靈山の釈迦のみまえにちぎりてし真如くちせずあひ見つる  
かな

とあるのと同じ歌であろう。この歌は、『袋草紙』等の歌学書、  
『沙石集』等の説話集、如白本・米沢本・延慶本等の『平家物  
語』、『太平記』にも記されているが、本歌と全く同一の本文を  
有する本は見当たらぬ。

「世ヲ救フ」の歌は、『沙石集』巻二、「地藏菩薩靈驗記」巻  
六にみられる。後者の歌のみ記すと、

世ヲ救心ハ我モ有物ヲ権ノ姿ハ免ニモ角ニモ（古典文  
庫）

となる。歌に小異があり、作歌事情も異なるが、作者を地藏と

する点では一致している。

以上のように、七首中『沙石集』と重なる歌が四首あり、その類の説話集から抜き出したと思われるが、歌には相違点があり、判然としない和歌もみられる。

最後に、「平家一部之引歌」に関して付言すれば、櫻井氏紹介の七本の『和歌拔書』以外に、やはり架蔵の写本『平家物語書中歌』がある。この書は、『平家物語』流布本を写したようだが、途中に『源平盛衰記』の歌が入っている。写しは明治二十三年であり、明治になってもこのような和歌拔書が写されたことがわかる。

ここに、『平家継図』并平家一部歌の書誌を記す。

所蔵、架蔵。

形態、袋綴、一冊。〔室町後期〕写。

寸法、竪一七・〇糎、横一五・一糎。

表紙、後補縹色表紙。

外題、ナシ。ただし、元の外題かと思われる切紙があり「平

家継図并平家一部歌」と墨書。

内題、「平家之継図」(1オ)、「平家一部之引歌」(3オ)

料紙、斐楮交漉紙。

丁数、一〇丁。

行数、和歌部分は半葉一四行。

字高、約一五糎。

朱引、系図部分の傍線は朱。

奥書、ナシ。

印記、ナシ。

以下に『平家継図』并平家一部歌の全文を翻刻する。翻刻に際して、次の方針をとった。

- 1 本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字の旧字体はおおむね現行書体に改めた。
- 2 底本の丁数は、その頁の末尾に( )をもって記した。
- 3 巻末の釈教歌には内題がない。前と区別するために、(釈教歌)と私に内題を付した。
- 4 私に「平家一部之引歌」の歌番号を算用数字にて記した。

(いしかわ とおる)

平家継図 并平家一部歌

平家之継図

桓武天皇 — 一品式部卿葛原親王 — 高見親王 — 高望親王

良望親王 — 從二位貞盛 — 四位小將常陸守維衡

越前守政度 — 出羽守政衡 — 播磨守政盛 — 刑部卿忠盛

国香四位小將常陸守維衡之子也 (1才)

此五人之中、清盛ハ養子四人刑部卿忠盛ノ直子也ト云

清盛ハ鳥羽院之御子也 慈惠大師ノ化身也云 云寿永元年寅年六十四死ル也

古池ノ禪尼腹ノ子也 丹波小將成常ノ聲也

安芸守清盛

池大納言頼盛

平宰相教盛

修理大夫経盛

薩摩守忠度

安芸守基盛

内大臣重盛

新中納言知盛

武藏守知彰アキラ

左馬頭行盛

大夫篤盛

武藏守知彰アキラ 一谷ニテ父ノ命ニ替テ打死ス

左馬頭行盛

大夫篤盛

若狭守経俊

但島守経政

藏人大夫業盛 一谷ニテ打死 (1ウ)

能登守教経 壇浦ニテ入水

中納言律師仲快 八島ニテ生取也

越前三位通盛 一谷ニテ打死

越前守政度

出羽守政衡

播磨守政盛

刑部卿忠盛

右大将宗盛

本三位中将重衡

三河守知度

尾張守清貞

淡路守清房

丹波守清邦

右衛門督清宗 八才ニテ死ス

(2才)

權佐三位中将維盛

新三位中将資盛

左中将清経

小松少将有盛

丹後侍従忠房

備中守師盛

已上畢 (2ウ)

此六人内大臣重盛ノ子也

三月二十三日那知ノ浦ニテ自水也 年二十七

法名淨円成親ノ聲也 天下ノ乗台シタル人也

六代 十二才ニテ出家也

三月二十三日那知ノ浦ニテ自水也 年二十七

法名淨円成親ノ聲也 天下ノ乗台シタル人也

六代 十二才ニテ出家也

三月二十三日那知ノ浦ニテ自水也 年二十七

法名淨円成親ノ聲也 天下ノ乗台シタル人也

六代 十二才ニテ出家也

三月二十三日那知ノ浦ニテ自水也 年二十七

平家一部之引歌

一卷 殿上暗打

一在明ノ月モ明石ノ浦風ニ

波斗コソヨルト見ヘシカ

2 雲井ヨリ忠盛来ル月ナレハ

朦氣ニタニラカシトソ思フ

3 萌出ル枯ルモ同シ野辺ノ草

何カ秋ニアワテハツヘキ

忠盛

女房

妓王

三条之姫

4 浮キ臥ニ流モヤラテ川竹ノ  
世ニタメシナキ名ヲヤ流キ  
5 思キヤ浮身ナカラニ廻来テ  
同シ雲井ノ月ヲ見ントハ

大宮

16 雲井ヨリ落来ル滝ノ白糸ニ  
契ヲ結フ事ヲ喜シキ  
17 立婦名残モ有ノ浦ナレハ  
神モ恵ヲカクル白波

鹿之谷

6 桜花賀茂ノ川風ウラムナヨ  
チルヲハエコメ留メサリケン  
7 深山木ノ其梢トモ見ヘサリシ  
桜ヲハ花ニアラワレニケリ

高房

18 千年経君カヨハイヲ藤波ノ  
松ノ枝ニモカ、リヌル哉  
19 コヒシクハ来テモ見ヨク身ニソフル  
影ヲハイカニ離ヤルヘキ

御輿振

8 陸奥ノアコヤノ松ニ木隠テ  
出ヘキ月モ出モヤラネハ  
9 折来シ吾立袖ノ引カヘテ  
人ナキ峰トナリヤハテナム

鷹居

20 山法師ヲリ延衣ウスクシテ  
ハジヲハエコソカクサ、リケレ  
21 ヲリ延ヲ一切モエヌ我ヲサヘ  
ウスハジヲカクス数ニ入哉

少将流

10 終ニカク背ハテヌル世間ヲ  
トク捨サリシ事ソクヤシキ  
11 千破屋経神ニ折ノ重ケケレハ  
ナトカ都ヘカヘスサルヘキ

落書

22 伊勢武者ハミテ火ヲトシノヨロイキテ  
宇治ノアジロニカ、リヌル哉  
23 埋木ノ花咲事ハ無レトモ  
身ノナルハテソ悲カリケル

山門滅亡

12 サツマ方奥ノ小島ニ我アリテ  
親ニハ告ヨ八重ノ塩風  
13 思ヒヤレシハシ思ノ旅タニモ  
尚古郷ハコヒシキ物ヲ

宮最后

24 人知レヌ大得山ノ々守ハ  
木カクレテノミ月ヲ見ル哉  
25 登ヘキ便ナキノ身ハ木ノ下ニ  
椎ヲ捨テテ世ヲ渡リケリ

祝イハヒ

14 古郷ノ花ノ物云世ナリセハ  
イカニ昔ノ事ヲ問マシ  
15 古郷ノ軒ノ板間ノ苔庭  
思シ程ハモヲヌ月哉

伊豆守

26 杜鵑名ヲモ雲井ニアクル哉  
弓ハリ月ノイルニ任テ  
27 五月暗名ヲ願セル今宵哉  
タソカレ時モ過ヌト思ヘハ

率都婆流

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

頼正

同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同

三卷

成常帰洛  
少将都落

四卷

安頼  
古歌  
安頼  
四卷  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同



28 百年ヲ四返モマテニ過來シラ

小田木ノ里ノアレヤハテナン

29 咲出ル花ノ都ヲ打捨テ

風吹原ノ末ソアヤウキ

30 待宵ノ更行鐘ノ声聞ケハ

アカヌ別ノ鳥ハ物カワ

31 物カワト公カ云イケン鳥ノ音モ

今朝シモナトカ悲シカルラン

32 待ハコソ更行鐘モツラカラメ

アカヌ別ノ鳥ノ音ソウキ

富士川合戦

33 東路ノ草葉ヲ分ン袖ヨリモ

立又袂ノ露ソコボル、

34 別路ヲ何カ歎ン迷行

関モ昔ノアトラ知ルヘニ

35 都ナル宗盛イカニサワクラン

柱ト憑助ヲヲトシテ

36 富士川ノ瀬々ノ岩越ス波ヨリモ

早クモ落ル伊勢ヘイジ哉

37 富士川ニヨロイハ捨ツ墨染ノ

衣忠清後ノ世ノタメ

38 忠清ハ二毛ノ馬ニソ乗テ知ル

上総シリガイカケテ甲斐ナシ

39 キク度ニメツラシケレハ時鳥

何モ初音ノ心地コススレ

藏人

侍従

宮原女房

忠度

落書

(5才)

同

同

花桜院

僧正陽院

40 常ニ見シ君カ御幸ヲ今日問ヘハ

帰ヲ又旅ト聞ソカナシキ

41 雲ノ上行スエ遠ク見シ月ノ

光消ヌト聞ヲ悲キ

42 忍レト色ニ出ニケリ我カ恋ハ

物ヤ思フト人ノ問マテ

43 思キヤ心ハソラニ陸奥ノ

千家ノ塩竈近キカイナシ

44 イモガ子ハ早ハウ程ニナリニ覺

忠盛取テ養ニセヨ

45 夜鳴スト忠盛立ヨ末ノ代ニ

清ク盛ル事モコソアレ

46 玉章ヲ今ハ手ニタニ取ラシトヤ

サコソ心ニ思ヒスツトモ

47 玉章ヲ只其任ニ返スタニ

手ヤフレケントナツカシキ哉

48 五月雨ニ池ノ真薦ノ茂リアイテ

何レアヤメト引ソカネヌル

49 ナハヤ経神ニイノリノ重ケレハ

ハヤクモ色ニ顯ニケリ

50 平カニ花咲宿毛年経レハ

西ヘカタフク月トコソ見レ

51 如何ニセン藤ノ末葉ノ枯行ヲ

タ、春ノ日ニ任テヤミン

朝賢法印

女房

正聖

冷泉大納言

白川院

同

冷泉大納言

頼正

同

経政

山王神歌

春日神歌

都落

52 瀟ヤ志賀ノ都ハ荒ニシヲ

忠度

修理大夫

64 月ヲ見シ去年ノ今宵ノ友ノミヤ

都

神カ

鷹居大納言

53 飽スシテ別ル、君カ名残ヲハ

御室

65 恋シトヨ去年ノ今宵ハ夜終

宗盛

経政ノ事歎  
常止

54 呉竹ノ掛樋ノ水ハカハルトモ

返歌

66 分テ来シ野辺ノ露トモ消スシテ

経政

青山獅子丸

55 旅衣夜ナク袖ヲカクシ来テ

常正

九卷 勢調

67 今日迄ハアレハ在カノ我身ニテ

常正

56 哀也老木若木モ山桜

行慶法印

68 人シレヌ其カタ忍心ヲハ

景隆

一門都落

57 ハカナシヤ主ハ雲井ニ別ルレハ

教盛

二度ノ懸ケ

69 武士ノ取伝タル梓弓

景隆

58 古郷ヲ焼野カ原ト打詠メ

経盛

最後

70 行キ暮テ木ノ下影ヲ宿トセハ

忠度

八卷 法王都入

59 一声ハ思出テ鳴郭公

末毛煙ノ波路ヲソ行ク

小宰相ノ身投

71 吾カ恋ハ細谷川ノマルキ橋

通盛

60 篋ノ内モ猶浦山シ山柄ノ

身ノホトカクスタ顔ノ宿

72 只頼メ細谷川ノ円木橋

正聖門院

名虎

61 住ナレシ古キ都ノコヒシサハ

神モ昔ヲ思出ラン

十卷 一門頸渡

73 何クトモ知ラヌ仰ノ一切衆生

経盛

62 世ノ間ノ宇佐ニハ神モナキ物ヲ

何祈ラン心ツクシニ

内裏女房

74 泪河憂名ヲ流ス身也トモ

重衡

内大臣古引歌

63 去トモト思フ心モ虫ノ音モ

ヨハリハテタル秋ノ暮哉

重衡

75 君故ニ吾モウキ名ヲ流ストモ

女房返

(7オ)

(7ウ)

東下

76 相事モ露ノ命モモロトモニ

重衡

十二卷

女房

77 限トテ立別ルレハ露ノ身ノ

返歌

88 セキカケテ泪ノカ、ル唐衣

大納言

78 旅ノ空ハニフノ小屋ノイフセサニ

湯屋侍従

89 ユキカクル衣モ今ハ何カセン

平大納言

79 惜カラヌ命ナレトモ今日迄ニ

重衡

90 帰リ来ン事ハカタ田ノ引網ノ

(9才)

横笛

80 剃迄ハ恨シカトモ梓弓

瀧口入道

出家

91 白波ノ打驚ス度コトニ

女院

返歌

81 ソルトテモ何カ恨ン梓弓

横笛女

小原入

92 時鳥花橘ノ香ヲ留テ

助嬌

藤渡

82 君任ハ爰モ雲井ワヨザノ浦

重衡

同御幸

93 岩根フミ誰カハ問ン櫓ノ葉ノ

女院

十一卷

83 詠レハヌル、袂ニヤトリケリ

(8才)

同御幸

94 池水ニ汀ノ桜散シキテ

女院

84 雲ノ上見シニ替ラヌ月ナレハ

重衡

同御幸

95 思イキヤ深山ノ奥ニ住居シテ

同

大納言

85 吾身コソ明石ノ浦ニ旅セメヤ

重衡

同御幸

96 此比ハイツナラワシキ我カ心

定公

劍之卷

86 八雲立出雲八重垣妻コメテ

重衡

同御幸

97 古モ夢ニ成ニシ事ナレハ

女院

腰越

87 都ヲハ今日ヲ限ノ関水ニ

重衡

同御幸

98 古ハ月ニタトヘシ公ナレハ

女院

又相坂ノ影ヤ移サン

六道

99 倡サラハ泪クラヘン時鳥

吾モ憂世ニ音ヲノミソ鳴

100 古郷ハ恋クモナシ旅ノ空 湯屋侍従

何クモ終ノ住家ナラネハ (10才)

〔釈教歌〕

吾行テ常ニソ守ル般若台尺迦ノ御法ノアラン限りハ

我ヲ知レ尺迦牟尼仏ノ世ニ出テサヤケキ月ノ世ヲ照ス也

山城ノ国笠置寺ニ解脱上人閑居シ玉フケル時春日ノ明神

上人ノ跡ヲ追テ影向アリ読玉フケル也

皮生テ縦六十八送ルトモ申ハ過又無碍ノ身ヤ

解脱又笠置ハ交衆ノ寺也トテ又三ケノ原海中山ト云寺ニ

移リ住玉フ也此寺ニ漏出ノ觀音御坐ス也此歌ハ中将姫読

玉フト云説アリ何レニ三十一ノ年読ル也

今更ニ思フト云モ頼レヌ人ノ心ノカハルト思ヘハ

此歌ハ觀音ノ御詠歌也意ハ解脱ハ住所不定ノ人ナレハ今

海中山ニ住ル、ト云ヘトモ又心ヤカハリ玉ント也

法性ノ室戸ト聞テ吾レスメハ有為ノ波風タ、又日モナシ

此ハ土州室戸ニ御住ノ御時弘法読玉フ也

靈山ノ尺迦ノ御前ニ頼メ真如クテセス今日見ツル哉

行基菩薩嵯峨へ初テ參給フ時

世ヲ救フ心ハ誰モアルモノヲ外ノ体ハ菟ニモ角ニモ

此ハ洛中ノ貴賤先清水へ參帰リニ六ハラノ地藏へ參ケレ

ハ地藏述懐ノ歌也 (10ウ)